ホスピス医 生命語る

闘病中 愛情込め自作の歌も

東松山

「患者本位」の緩和ケアや在宅医療に関わってきた東松山市松山のシャローム病院前院長、鋤柄稔医師(78)が、同市の高坂市民活動センターで、トークと音楽の集い「生命(いのち)の語らい～ホスピス医が、ホスピスケアを受ける側に立って～」を開いた。今年9月、進行胃がんと診断された鋤柄さんの赤裸々なトークと、愛情のこもった自作の歌に感動の輪が広がった。

鋤柄さんは東松山で生まれ育った。県立川越高校、信州大学医学部を卒業後、埼玉医科大学病院に21年間勤務、1994年、地元にシャローム鋤柄医院を開設し同院長、2013年にシャローム病院院長。16年には地域で唯一の緩和ケア病棟を開設し、がん患者のホスピスケアを本格的に開始した。22年、日本医師会の赤ひげ大賞を受賞。今年10月末、理事長を退任した。

鋤柄さんは9年前、病院運営の傍ら「感謝とねぎらいの歌～あなたの価値は変わらない～」「10倍の愛」を作詩作曲。高齢者(母)や家族(妻)への応援歌は「深い愛がにじむ」と話題に。その後、歌の編曲を担当した大内一郎さんや、笠原恵さんら音楽仲間がグループ「10倍の感謝」を結成。今回の集いは「長年の感謝を伝えたい」との鋤柄さんの思いに同グループが企画した。

トークは、大内さんが鋤柄さんに質問する形で進行。子どものころの生活や、医学の道を志した理由、大学病院時代、病院の開設、緩和ケア病棟を開いた思い、自身の病と現在の思いなどを語った。

ホスピス開設に思い立ったのはアメリカでの医療留学中。がん患者にはまだ「宣告しない」時代、「何となく亡くなっていく。こんなみとりで良いのか、どのようにみとるか」との思いがあったという。

自身の病を知ったのは今年9月。息切れを感じ血液・CT検査を行い、進行胃がんと診断された。「自分では手術できない。残された人生をどう生きるか。こうなったことを自分が受け入れるしかない。お別れの会とは思わないが、まず患者さん、病院スタッフらに伝えようと考えた」

現在、抗がん剤治療中。辛い日が続くが、「幸い抗がん剤が効いており、一息ついている」。今も合間には診察や往診も続けている。

また、「最も大いなるもの～ホスピス医が、ホスピスケアを受ける側に立って～」と題した本を執筆中で、同名の3曲目の歌を作り、この日、初披露した。終了後、ロビーで一人一人と握手する鋤柄さんの姿に参加者の一人は「すてきなトークでした。先生の人柄が出ている。感動しました」と話していた。

(磯田正重)

初披露した自作の歌「最も大いなるもの」について語る鋤柄稔さん＝東松山市宮鼻の高坂市民活動センター